

論文の内容の要旨

氏名：成 田 正 人

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

論文題名：帰納を巡る一般化と未来の問題ーヒュームを手がかりとしてー

帰納とは、われわれの個別の経験から、未経験の次の一回の信念や（それを含む）一般化の信念を導く推論である。たとえば、われわれは、太陽は今日まで東から昇ってきたので、太陽は明日もまた東から昇ってくる、と考える。あるいは、調査しているエメラルドがすべて緑色であることが経験されると、調査していないエメラルドもすべて緑色であることが推論される。だが、なぜわれわれは、経験している（個別の）事柄から、経験していない事柄（を含む一般化）へと飛躍できるのか。これまでがそうであるからといって、どうしてこれからもそうであるといえるのか。

こうした帰納を巡る問いは、すでに二世紀のセクストス・エンペイリコスの著作にも見られるが、いわゆる「帰納の問題」を哲学史上もっとも決定的に論じたのは、やはり十八世紀のデイヴィッド・ヒュームである。そのため、本論文は彼を「帰納の問題」を考える手がかりとする。本論文の目標は、彼の経験論的な知覚論を手がかりに、帰納（的な推論や信念）には、一般化の正当性の問題とは別に、未来の経験の問題があること、また、われわれの（自然な）帰納の本当の問題は、前者の「認識論的な問題」でなく、後者の「形而上学的な問題」であることを浮かび上がらせることである。

本論文は大きく三つの部に分けられる。すなわち、第1部でヒュームの経験論的な知覚論を見てから、第2部と第3部で「帰納の認識論的な問題」と「帰納の形而上学的な問題」を論じる。また、それら三つの部には、それぞれ三つの章が含まれる。そのため、本論文は全部で九つの章から成ることになる。

第1章では、われわれの知覚を彼がどのように区分するのかを確認する。まず、われわれの知覚は、そこに感じる活気の程度の違いから、印象と観念に分けられる。だが、観念はまた記憶と想像に二分され、想像はさらに信念と空想に二分される。なぜなら、それらの観念の間にも、活気の程度の違いがあるからである。すると、われわれの知覚は①印象②記憶③想像④信念に区分されることになる。だが、それら四つの知覚を分ける活気とは、そもそも何であるのか。本論文では、それを現実（や現前）の感じである、と考えたい。

第2章では、彼の「第一原理」と「青の欠けた色合い」を検討する。彼は、印象と観念の区分に、単純と複雑の区分を交差し、彼の探求の「第一原理」を確立する。すなわち、単純な観念は類似する単純な印象から生じる、と。けれども、なぜか彼はその反例と見なせる状況を自ら描き出す。それが「青の欠けた色合い」である。だが、本論文の解釈では、それは「第一原理」を（実際に）反証するわけではない。なぜなら、彼の「第一原理」は「類似性テーゼ」と「因果性テーゼ」から成るからである。彼の「観念の関係」と「事実の問題」に鑑みれば、印象と観念の類似関係は「観念の関係」であるが、印象と観念の因果関係は「事実の問題」である。とはいえ、「青の欠けた色合い」は「因果性テーゼ」の（思考）可能な反例でしかない。だから、それは「第一原理」を反証するには至らないのである。

第3章では、彼の知覚論や因果論に援用される「思考可能性の原理」（の逆）に着目し、観念の思考（不）可能性と印象の経験（不）可能性を考察する。なるほど、複雑な印象の経験（不）可能性は、複雑な観念の思考（不）可能性から、捉えられる。また、単純な観念の思考が可能であるとき、たしかに単純な印象の経験は可能である。だが、知覚が単純であると、「思考可能性の原理」の逆は（文字通りには）成立しない。なぜなら、仮に、未知なる観念の思考が不可能なことから、類似する印象の経験が不可能なことになれば、われわれはそもそも（新たな）印象をまったく経験できなくなるからである。そのため、単純な印象の（原理的な）経験可能性は、単純な観念の（実践的な）思考可能性からは、捉え切れない。すなわち、どんな印象がなぜ生じるのか、われわれには知ることはできない。だが、われわれは（なぜか）印象を経験しうるのでなければならない。さもなければ、彼の経験論そのものが可能とならないからである。

第4章では、次の一回の信念を推論する帰納と一般化の信念を推論する帰納を定式化し、彼の知覚論を下敷きに「帰納の問題」を概観する。また、そこでは彼の因果論も確認することになる。なぜなら、帰納的な推論は、——記憶（や印象）を前提として、——原因と結果の関係から想像されるときに、空想でなく、（現実と感じる）信念を結論とするからである。彼の因果論では、因果的な推論は本質的に帰納的な推論なのである。

第5章では、彼が論じる「帰納の問題」を通観するために、彼と共に、なぜ「自然の斉一性」が帰納を（合

理的に) 正当化しないのかを検討する。また、そこには、——標準的な解釈に倣い、——帰納を巡る一般化の正当性の問題があることを明らかにする。帰納(的な推論や信念)の正当性が問われるとき、論点となるのは、一般化の帰納の正当性である。なぜなら、次の一回の帰納の正当性は、それがいつこのことであろうと、一般化の帰納の正当性に回収されるからである。だから、「帰納の問題」は(標準的には)一般化の正当性の問題なのである。本論文はそれを「帰納の認識論的な問題」と名付ける。そこで論点となるのは、われわれの推論や信念(そのもの)の正当性だからである。

第6章では、「帰納の認識論的な問題」の懐疑論的な解決を取り上げる。原因と結果の必然的結合や「自然の斉一性」は一般化の正当性の問題を(合理的には)解決しない。そこで、われわれが(ヒュームと)歩むべきは、懐疑論的な解決の方向である。彼自身はそれを自然(本性)主義的に解消する。つまり、われわれの帰納(的な推論や信念)は、(原因と結果の恒常的连接の)習慣と(現前する)印象から、自然と生じるときに、正しい(とされる)のである。また、彼によれば、帰納的に推論される信念には、様々な「確信の程度」が伴われる。すると、帰納の(大まかな)正誤は確率論的に定義されることになる。だが、彼の「真理の対応説」に従えば、帰納(的な推論や信念)は、「現実の存在」と対応し、さらに真理値を獲得することになる。すなわち、われわれの帰納は、——準実在論的な解釈に倣えば、——「想像上の基準」と合致するときには、「確信の程度」が高いだけでなく、真(理)となるのである。

第7章では、帰納を巡る未来の経験の問題を論じる。本論文はそれを「帰納の形而上学的な問題」と名付ける。そこで論点となるのは、われわれの(過去と)未来の経験のあり方(の違い)だからである。われわれが帰納的に推論する信念には、確率や基準から分かる正誤とは独立に、印象の現実が突き付けられる。すると、このときには、帰納が対応する「現実の存在」は、現前する印象の現実であることになる。だが、印象の現実は今(ここ)に現前する現実である。そして、(なぜか)われわれは、過去の印象は経験できないが、未来の印象は経験できる。そのため、過去向きの帰納には、印象の現実との対応は問われない。——もちろん、そこには「認識論的な問題」が生じる。——だが、われわれが未来を帰納的に推論するとき、そこには「形而上学的な問題」が生じる。すなわち、未来向きの帰納は、印象の現実に対応し、本当に当たったり外れたりするのである。

第8章では、われわれの(自然な)帰納の本当の問題は「形而上学的な問題」である、と論じる。帰納を巡る二つの問題のうち、「認識論的な問題」は(一般化の)観念の問題であるが、「形而上学的な問題」は(未来の)印象の問題である。つまり、前者では、どんな(一般化の)観念が思考されるかが問われるが、後者では、どんな(未来の)印象が経験されるかが問われる。また、前者の「認識論的な問題」は一般化の信念を推論する帰納に生じるが、後者の「形而上学的な問題」は次の一回の信念を推論する帰納に生じる。だから、それらは互いに独立の問題なのである。むしろ、それらは互いに何の係わりもないわけではない。なぜなら、次の一回の帰納の正当性は(合理的には)一般化の帰納の正当性に帰されるからである。だが、そもそも、なぜわれわれは次の一回の帰納の正当化を求めるのか。われわれは、(過去の)観念がどうであろうと、本当は困らない。だから、そこに生じる「認識論的な問題」は、言わば「帰納の懐疑論」でしかない。けれども、われわれは、帰納が的中しないと、本当に困る。(未来の)印象がどうであるかは、われわれを本当に悩ませる。だから、ここに生じる「形而上学的な問題」が、本当の「帰納の問題」なのである。

第9章では、ここまでに棚上げにした帰納と時間を巡る三つの問いを(少しだけ)考える。第一に、未来に印象が生じることは、「観念の関係」なのか、それとも、「事実の問題」なのか。また、それが「事実の問題」なら、そこには「帰納の問題」が生じるのか。第二に、われわれ(の知覚や経験)を離れても、過去(の存在)と未来(の存在)は非対称的であるのか。仮にそうだとすれば、そこには「帰納の存在論的な問題」が生じることになる。第三に、「帰納の形而上学的な問題」は(われわれの)今の問題であるのか。もし(われわれに)今がなければ、——「帰納の認識論的な問題」は生じるだろうが、——「帰納の形而上学的な問題」は生じないのだろうか。

以上から、本論文が試みるのは、帰納(的な推論や信念)には、一般化(の観念)の正当性の問題とは独立に、未来(の印象)の経験の問題があることを解き明かし、それらのうち、われわれの(自然な)帰納に本当に問題となるのは、前者の「認識論的な問題」でなく、後者の「形而上学的な問題」であることを描き出すことである。